

「	わ	か	り	ま	し	た	。	そ	れ	で	は	い	い	で	す	か	番	才	様
だ	ろ	う	て	。」															
美	禄	、	あ	ん	た	も	新	し	い	経	験	と	感	情	を	得	ら	れ	る
日	じ	ゃ	変	わ	っ	て	る	。	話	し	て	お	や	り	よ	。	き	つ	と
や	経	験	、	感	情	や	未	来	な	ん	て	も	ん	も	、	今	日	と	明
ね	。	そ	れ	は	目	に	見	え	る	物	だ	け	じ	ゃ	な	い	。	記	憶
	「	あ	ら	ゆ	る	物	は	常	に	変	化	し	続	け	て	る	も	ん	さ
っ	た	。																	
を	簡	単	に	説	明	し	て	い	る	と	、	お	と	ぎ	話	の	話	に	な
ウ	ン	タ	ー	に	座	り	、	こ	れ	ま	で	の	経	緯	と	あ	ら	ま	し
す	。」	と	言	っ	て	く	れ	た	。	そ	れ	か	ら	同	じ	よ	う	に	力
と	、	声	を	震	わ	せ	な	が	ら	「	本	当	に	良	か	っ	た	で	
外	か	ら	帰	っ	て	来	た	美	禄	は	番	才	の	無	事	を	確	認	す
せ	ん	。」																	
い	出	し	て	。	何	か	の	き	つ	か	け	に	な	る	か	も	し	れ	ま
て	、	ふ	と	こ	の	『	法	信	と	青	い	狐	』	と	い	う	話	を	思
さ	っ	た	ん	で	す	。	雷	鼠	君	と	雫	ち	ゃ	ん	の	話	を	聞	い
な	っ	て	か	ら	も	部	屋	に	来	る	と	こ	の	話	を	し	て	く	だ
	「	そ	れ	で	も	大	才	バ	バ	様	は	、	わ	た	し	が	大	き	く
い	る	。																	

でも、	肩に	に身	で防	れま	吐き	に薪	うに	小動	とる		た。	労を	と山	下げ	米俵	名を			それ
、	に食	身を	ぎ、	まで	、滴	の束	地面	物を	こと	法信	。	交え	を二	げて	、余	を持	山中		は、
法	い込	を委	、し	燦々	、汗	束を	面に	を足	にし	は山		た浮	つほ	いる	った	つそ	を歩		、遠
信	んで	ねた	ばら	と照	を首	投げ	に下	下を	した	頂付		かな	ど超	。	た手	の青	一人		い遠
にと	いた	。	らく	りつ	に巻	。一	ろし	に置	。	近の		い顔	えね	愛す	に罨	年は	の青		い昔
つて	た縄		全身	つけて	いて	。一	、切	き、	。	少し		で一	ばな	る嫁	にか	は、	年が		の話
は自	から		を撫	いた	いる	。と	り株	肩か	。	開け		心に	なら	と子	かつ	背中	がいた		です
由と	解放		でて	太陽	布で	特大	に座	から	。	た場		歩を	ない	供が	た小	に薪	。法		。
変ら	され		いく	光を	拭う	の溜	つて	米俵	。	所で		を進	道中	待つ	動物	を背	信と		。
ない	ただ		風の	木	。	息を	から	落と	。	休憩		めて	を、	家ま	をぶ	負い	いう		
これ	け		感触	の笠	。	を	後ろ	すよ	。	を		い	、疲	であ	ら	肩に			

よ	足	た	ら	ら	ど	幸	要	と		い	だ	確	初	て	は	「	り	べ	「
う	下	ん	諫	そ	、	せ	と	の	（	つ	が	か	め	ね	守	好	だ	っ	お
な	に	だ	め	れ	何	は	さ	間	お	し	、	に	は	え	る	き	よ	ぴ	前
気	転	！	れ	ば	だ	間	れ	違	？	か	、	優	友	。い	べき	。勝	。ん	な	は
が	が	？	し	ま	こ	い	て	い	）	味	、	越	達	い	もの	手	な	嫁	昔
し	る	？	し	ま	の	い	る	な		が	、	感	や	が	生	嫁	さ	ん	から
て	小	？	ま	い	感	なく	。家	な		し	、	と	職	あ	き	さん	迎	え	目
、	動	？	い	だ	覚	お	で	な		な	、	幸	場	る	も	え	て	、	立
法	物	？	だ	。お	は	れの	出	。無		っ	、	福	の	か	が	、	い	や	つ
信	の	？	。お	れ	！	の	迎	い		て	、	感	人	ら	ら	、	や	く	存
は	死	？	れ	の	た	幸	え	物		、	、	は	か	そ	、	、	、	、	在
立	骸	？	は	わ	だ	せ	て	ね		、	、	満	そ	う	、	、	、	、	だ
ち	と	？	ど	が	の	だ	く	だ		、	、	た	言	い	、	、	、	、	っ
上	ふ	？	う	ま	無	。け	れ	り		、	、	さ	わ	れ	、	、	、	、	た
が	と	？	し	ま	い	ど	る	な		、	、	れ	れ	る	、	、	、	、	か
り	目	？	ま	な	物	。け	家	だ		、	、	て	る	し	、	、	、	、	ら
そ	が	？	の	だ	ね	ど	族	り		、	、	い	っ	必	、	、	、	、	な
れ	合	？	と	し	だ	。け	の	な		、	、	っ	た	、	、	、	、	、	あ
を	っ	？	した	ら	け	。け	し	な		、	、	。い	。あ	、	、	、	、	、	。あ
力	た	？	ら	た	け	。け	必	な		、	、	っ	。あ	、	、	、	、	、	。あ

少し	「妾に、それを譲ってはくれまいか。」	が上がっていくのを袖で隠した。	ただけで視線を足下の小動物へと向け、口角	信のその行動には何の反応も示さず、一瞥し	数珠をかざし、相手の出方を窺った。女は法	見抜き、腰の短刀に手を掛け身に付けていた	法信はすぐにその女が人間ではないことを	立ってこちらを見ていた。	が、高さのない階段を二十段ほど上った先で	うに視線を上げると、着物を着た青い髪の女	（ここは・・・）と何気なく階段をなぞるよ	に急に現れる古ぼけた階段の下に来ていた。	言い聞かせながら近づいてみると、道の途中	し、雨が降っていないだけかもしれません。と自分に	声を荒げ坂を下る。（今日は特に荷物が重い	「くそっ！」	て来た坂道を転がり止まった。	思った以上に飛んでいった死骸は、今登つ	の限り蹴り飛ばした。
----	--------------------	-----------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------------	----------------------	--------	----------------	---------------------	------------

動	い	な	女	の	「	か	で		に	と	に	女		法	滑	「	艶	く	伝
に	る	っ	は	色	強	に	も		息	を	視	は	は	信	稽	動	に	く	わ
少	と	た	着	変	気	や	妖		を	何	線	頬	は	は	な	く	細	っ	
し	わ	肌	物	え	な	騙	怪		吐	往	を	を	は	は	狐	く	な	つ	
だ	か	を	の	て	男	さ	退		い	復	こ	膨	は	は	が	な	な	て	
け	っ	寄	胸	妾	じ	れ	治		た	か	ち	ら	ま	い	な	が	ら	い	
瞳	つ	せ	元	に	ゃ	な	は		な	見	ら	ま	せ	い	が	ら	階	き	
孔	い	て	を	従	な	い	と		。	た	せ	声	色	。	い	く	ら	、	
が	て	も	左	っ	。	。	り			な	色	を	元	。	。	人	華	華	
開	、	美	右	た	大		わ			。	を	元	に	。	間	奢	奢	。	
く	し	しい	に	ぞ	抵		け			。	戻	戻	戻	。	の	で	。	。	
。	美	女	は		の		優			。	し	戻	戻	。	真	魅	。	。	
法	しい	の	だ		奴		秀			。	女	戻	戻	。	似	惑	。	。	
信	女	大	け		は		で			。	の	戻	戻	。	事	的	。	。	
は	胆	胆	さ		こ		な			。	足	戻	戻	。	を	な	。	。	
女	な	行	せ		う		。			。	を	戻	戻	。	し	身	。	。	
の	行		、		す		。			。	止	戻	戻	。	て	体	。	。	
顔	な		露		れ		。			。	め	戻	戻	。	も	を	。	。	
と	行		わ		ば		。			。	た	戻	戻	。	。	妖	。	。	
谷	行		に		目		。			。	。	戻	戻	。	。	。	。	。	

間と全身とを何往復か見た後で、満足気に鼻
 から息を吐いた。
 「さあどうする！？こっちはお前たち狐
 に化かされて無残に殺された仲間の恨みがあ
 る。」
 交戦の意思を死骸を横にずらし相對すること
 で法信は示した。
 「まあ待ちなんし。妾は争い事は嫌いじゃ。
 良い男と腹を括った男とは特にのう。」
 ずらされた死骸に向いていた目線を女は法信
 に戻し、袖で口元を覆う。
 「どうしてもそれを妾にはくれぬか？」
 「これはやらん。お前がどうかは知らんが久
 しぶりの肉なんだ。家族に食わせてやりてえ
 ー。ー。ー。そうか。」
 女は何事かを思案し始め、法信に横顔を見せ
 るような形でその場に座り込んだ。
 「ならばタダでは言わん。交換ならどう
 じゃ？」

